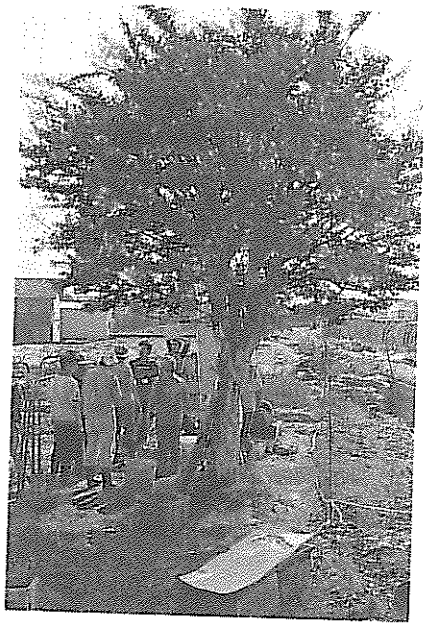
はじめに

『一人ひとりが人生の主人公』を二〇〇一年度に『みんなのねがい』に連載執筆したとき、何よりも伝えたかったことは、知的障害をもちつつ、それぞれの人生の主人公として輝いて生きている一人ひとりの仲間たちのことでした。今回の連載をお引き受けすることになったとき、それは二〇〇五年の秋だったのですが、障害者自立支援法というとんでもない悪法をめぐって、国中が揺れ動いているようなときでした。これまで、それぞれの地域で大切に紡がれてきた実践がどうなるのだろう、一年後にはどうなっているのだろうという全く先の見えない不安と憤りの中でしたから、「こんな時期に連載をお引き受けしていいのか」という思いが正直ありました。

しかし、そんな歴史的後退に直面させられているときだからこそ、法律にふりまわされそうなときだからこそ、もう一度、障害のある仲間たちの思いやねがいを伝えていきたいと考えました。同時に、それぞれの作業所や施設で、やっぱり人生の主人公として輝いている職員たちのことも書いていきたいと思いました。

厳しい労働条件のもとでも、仲間たちのねがいに少しでもこたえたいと奮闘している職員たち、仲間たちの笑顔やときにしんどさをわがことのように語り、笑い、悩む職員たち、仲間たちの姿に自分の仕事や生き方を重ね合わせて共感する職員たち、仲間たちの発達保障に取り組みながら、「パン屋」にも「陶芸家」にも「木工職人」にも「園芸家」にも挑戦している職員たち、「なんで応益負担なの!?」と家族といっしょに怒り、励ましあう職員たち、地域で悩み疲れている家族のもとに足を運ぶ職員たち……、そんな一人ひとりの職員たちの顔を思い浮かべながら、書いていきたいと思いました。

だから、タイトルは『しなやかに　したたかに　仲間と社会に向き合って』。ことばでうまく思いや悩みを語れない仲間たちに、しなやかでやわらかい心で向き合い、よりそい、肩を貸そうとしている職員たち、「これでもか、これでもか」と福祉の現場を苦しめているようにしか感じられない国の施策に対して、あきらめず、粘り強く、したたかに向き合っていこうとしている職員たちと、この本を通して、また少しでも語り合うことができれば幸せです。

二〇〇七年七月

白石恵理子